

令和つれづれ草

外交評論家・元外交官

金子熊夫

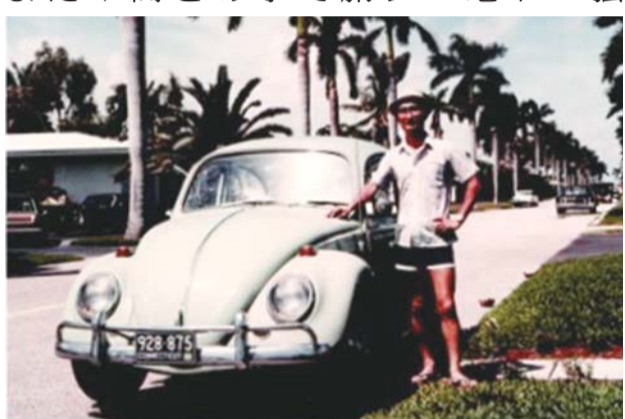
kaneko@eeecom.org



前回に続き昔話で恐縮ですが、老人の「センチメンタル・ジャーニー」として気楽にお読みください。さすれば幸いです。

私の最初の在米生活（1964～66年）の中

で、今でも強く印象に残っているのはやはり全米各地を愛車のフォルクスワーゲンで自動車旅行したこと。なにせ学生の身分なので、カネはともかく、時間とエネルギー（体力）はたつぷりありま



カリフォルニアで愛車のVWと

全米自動車旅行の思い出

古き良きアメリカ

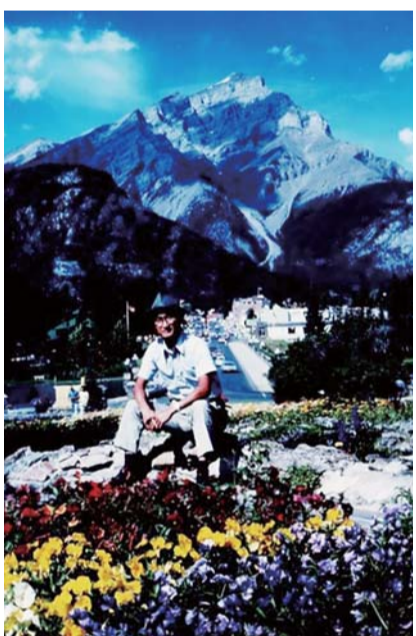
料理用のコルマン・ストーフ（圧縮空気型コンロ）、食器類一式を買い込み、勇んで一路西部を目指しました。

独り運転中の 睡魔との戦い

米国の幹線道路（ハイウェイ）は、当時の日本の道路と比べものにならないほど立派に整備されていて、運転は常に快適でしたが、何分にも国王

した方がよいと助言され、大学の夏休み丸2カ月半を使って全米各地を駆け回りましたが、最も楽しかったのは、中西部からロッキー山脈地方への旅行でした。大使館の先輩たちから、東海岸や西海岸の大都市はいつでも行けるから、学生時代はできるだけワシントンから遠い辺りな地方を見物

世界一美しい花の町バンフで



免許証を見せろと。眠い目をこすりながら、外交官旅券を提示すると、さすがに「イエス・サー。しかし十分注意して運転してくださいよ」と言われてあっさり放免してくれました。今思うと、大らかな時代でした。

いざロッキー山脈を目指して

最初の目的地はロッキー山脈の入り口のコロラド州デンバー。真夏でも高地なので涼しく快適で、開放感満点。ところが、誰が宣伝したか分かりませんが、ワシントンから若手の日本外交官がやって来るというので、近隣在住の日系アメリカ人の方々が大勢集まってくれたので、急ぎよ講演をしたり率直な意見交換をしました。

ただ、一人で運転しているとは単調なので、どうしても睡魔に襲われますが、その時は深く路肩に停車してひと眠り。当時はアメリカでも治安は比較的よく、暴漢に襲われる心配はないと言われていました。時々ハイウェイパトロールが通りかかって、窓を叩き、運転

無理やり強制収容所に入られて苦労した人が多く、生々しい体験を聞かせてもらいました。1980年代半ば、レーガン政権によって、日系米国人の強制収容の誤りを認め、正式に謝罪と損害賠償が行われましたが、それまでは長年つらい思いをされたようで、図らずも日米間の厳しい過去と直面させられました。

（2面に続く）

令和つれづれ草

金子熊夫

イエローストンは愛知県より広い

「古く忠実な」(Old Faithful)の愛称で知られる巨大な間欠泉は、一定間隔で忠実に噴出し、熱湯の柱は40〜50メートルの高さに達する驚異。時間のたつのも忘れて見とれまじつた。ここでテントを張って3泊。

グランド・ティートンの魅力

次に向かったのは、同じワイオミング州にあるグランド・ティートン国立公園。その規模は愛知県の1.5倍。園内を一周するだけで丸1日以上かかる大きさ。

大半が火山地帯で、さまざまな沸騰した温泉や熱沼が散在し、危うく飛び込みそうになって、ヒヤリの連続。中でも最も有名な



グランド・ティートン

立公園。ここは、4000メートル以上滞在してしましました。小屋の食堂でアルバイトしている、ハーバード大学の友人(アメリカ人)に偶然出会ったのもうれしい驚きでした。

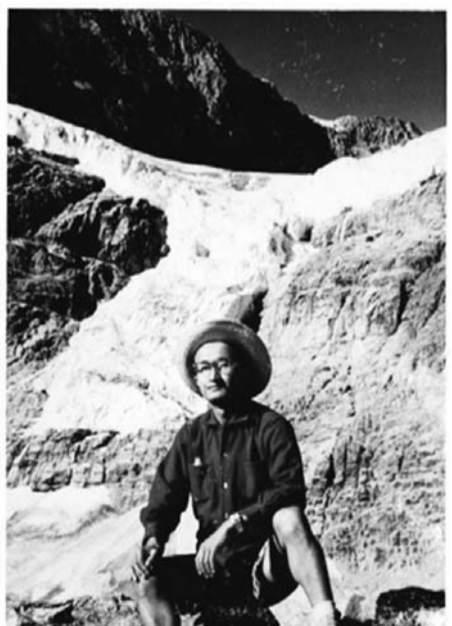
世界一美しい花畑の町バンフ

次にモンタナ州のいろいろな山岳地帯を北上し、さらにカナダ国境を越え、カナディアン・ロッキーと言われる地方に

全米自動車旅行の思い出

まで足を延ばしました。最初に訪れたのは、プリムカムバック! シェーンと必死に叫ぶ。あの有名なクライマックス場面の背景にそびえ立つのがこのグランドティートンの山並みで、主題歌通かなる山の呼び声の哀切なメロディと少年の叫び声がいままでこだまして...というわけで、すっかりグランド・ティートンの魅力に取りつかれて、山麓にテントを張って連日トレッキングを楽しみました。その結果、最初の予定を大幅に越え

広大なロッキン氷河(カナダ)



俗化するからという理由で断ったとか。さもありなん。ここで撮った写真(一面下段)の私の満足

ロッキー山脈を後に、太平洋岸のバンクーバーまで出て、そこから一挙に西海岸沿いに南下。シアトル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、サンディエゴを経て、メキシコ国境を越え、ティファナで闘牛を見物。再び米国に戻り、ネバダ州のラスベガスからようやく(ついに!)グランドキャニオンに到着。

グランドキャニオンでその聞きしに勝る巨大さに圧倒されて、3泊してあちこちを探索しましたが、気が付くと、もう夏休みも終わりに近づいており、仕方なく帰途に就くことにしました。ハーバードの秋学期の開始まで後1週間を切っていたので、グランドキャニオンからは、そこで偶然知り合った米国人の友人と交代で運転して、東海岸を目指して出発。

なにせ時間的余裕が全くないので、ガソリンを補充するとき以外は、完全にノンストップ。途中ミズーリ、ケンタッキー州あたりで大雨や雷雨に見舞われましたが、昼も夜もなく交代で運転して、北米大陸約4000キロ(北海道九州間を往復する距離)を4日4晩で走り切りました。

ボストンの近くの知人宅に転がり込んで、丸1日夜爆睡。彼の母親が、死んだのではないかと心配したそう。それもこれも若気の至りで、今では考えられないような無茶なことをしたものです。

無名時代のレーガン氏に会う

なお、西海岸のサンフランシスコやロサンゼルスでは、日本の学生時代に内職で観光ガイドをしていてお世話したアメリカ人夫妻などに再会し、歓待を受けました。特にロサンゼルスでは、ハリウッドの近くのビバリーヒルズという超高級住宅地に住む知人が、私のために歓迎パーティーを開いて、地元の名士などを紹介してくれました。その中には、まだカリフォルニア州知事になる前の

ロナルド・レーガン氏がいまいたが、後年大統領にまで出世するとは思わず、ハリウッドの元一流俳優(いつも脇役で、ゲリー・キューパーやクリク・ゲイブルなど名優の引き立て役)くらいにしか思っていまません。先見の明が無かったと言わざるを得ません。もう一つの新発見は、旅費節約のため、全米各地で毎日食べたホットドッグとココラの味が州や町ごとに微妙に違っていてどれもおいしかったこと。お陰で、日本にいた頃は馬鹿にして全く飲んだことがなかったココラが大好きになりました。

いずれにせよ、二十代の若い日本人が、こうして無事に、自由自在に全米を旅行できたのも、やはり「古き良き時代」だったのだと思います。

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元国連環境計画(UNEP)アジア太平洋地域代表、元東海大学教授、現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、84歳。